

第3回紀の川市まち・ひと・しごと創生総合戦略審議会 要旨

日時：平成27年11月19日（木） 10:00～11:45

場所：紀の川市役所本庁舎3階 庁議室

出席者： 11名

欠席： 4名

資料：第3回紀の川市まち・ひと・しごと創生総合戦略審議会 次第

- ①第2回紀の川市まち・ひと・しごと創生総合戦略審議会 要旨
- ②紀の川市まち・ひと・しごと創生総合戦略（案）
- ③紀の川市まち・ひと・しごと創生総合戦略概要説明
- ④総合戦略策定スケジュール（平成27年11月～12月）
- ⑤紀の川市総合戦略体系

1. 開会

2. あいさつ …会長あいさつ

3. 議題

（1）前回要旨の確認

- ・特に異議なし

（2）紀の川市まち・ひと・しごと創生本部第3回本部会の報告について

- ・11/16実施、意見を反映して本資料を作成（事務局報告）

（3）紀の川市まち・ひと・しごと創生総合戦略（案）について

- ・資料②～⑤説明
- ・お気づきの点など11/24までにご意見いただきたい。

[ご意見要旨]

- ・人口減少に歯止めをかける戦略になっているか。
- ・農業の視点からは「フルーツに特化」より「いろいろな農作物を切れ目なく作ること」が重要
- ・紀の川市の発信の観点からは「フルーツに特化」ではなく、本編にあるように「フルーツを核とした」という表現にするほうがよい。
- ・農業に関しては厳しい状況。各論において10年先の農業のあり方、農地のあり方の検討が必要
- ・まちづくり、ゾーニングの観点から農地のことを含めて市として検討することが必要
- ・地域の活性化や子育てのこと等、どうしていけばよいかを話し合う会議の場を設置するとよい。
- ・商業への支援について、特に既存商業の世代交代への支援等について追記してほしい
- ・高野山へつながる古道など、歴史的資源の掘り起こしによる観光ルートづくりを検討するとよい。
- ・子育てへの切れ目ない支援として、高校から大学への時期を支える取り組みも重要ではないか。
- ・高校生の活用、高校の魅力化なども検討するとよい。
- ・近大の学生さんが働ける企業に来てもらう努力などの視点が必要
- ・直近の取り組みと中長期の取り組みの仕分け、その効果の回り方（指標）を検討し、「京奈和関空連絡道路整備」に関して、もう少し書き込めるなら書き込んでほしい。

[ご意見記録]

(委員)

総合戦略は金太郎飴的になるのではとの懸念がある。和歌山県は平成 20 年度ビリから 7 番目の現状。大阪に近いのはメリットでもあるが、デメリットでもあると考えられる。紀の川の人口と消費は大阪に吸い上げられる可能性も無きにしもあらずと考えてもよいのではないか。そういった分析がはいっているか。人口減少に歯止めをかける戦略となっているか。例えば「市歌の普及」はどんな効果があるのか。

農業の視点からは「フルーツに特化」は今さら流行らない。農家にとっては、自分ちの労働力でどうやっていくかを考えており、年中、切れ目のない農作物を作ることが大事である。雇用をすればコストがかかる。TPP が執行されたら、和歌山にとって有利な状況ではないだろう。それまでに紀の川市の農業をどうするかということ、もう少しだけ具体的に考えてほしい。一番の和歌山の欠点は基盤整備がされてないことと考える。大消費地の近郊であるメリットは蔬菜産地として確立していくことである。遊休農地が増えているのは現実で、元に戻すのはほとんどできない。もう防ぎようがないのではないかと考える。基盤の整備をすることによって、紀の川は野菜の大産地になるということも頭に入れておいてほしい。フルーツは機械化が難しく人件費倒れになる可能性も多分にある。現状をもっと分析して、実現できることを計画してほしい。

→ (事務局) 相談して反映していきたい。

(委員)

新規採用職員の面接で、「1,000 万円所得があれば農業をやるか」とたずねたところ、誰もやると意向は示さなかった。これは、農業はしんどいということで、楽にできる農業でなくてはいけない、革靴でできる農業でないかと後継者は難しいということではないか。

(委員)

このままでは、20 年先には土地が荒れ放題にならないのか。それらの状況をふまえて考えるべきだ。

(委員)

山間地で農業を続けるのは難しい。労力がかかり、傾斜地では難しい。鳥獣害もある。

(会長)

10 年先の農業のあり方、農地のあり方を想定して、検討してほしい。

(委員)

非常に難しいことで、対策の案ができる状況ではない。誰もが耕作放棄地が増えるだろうと思っている。現在は農業者の善意で、隣の農地に迷惑をかけないように採算など度外視して、耕作放棄地にしないように努力しているだけである。本当は放りたい。誰もが、あと 5 年もしたら耕作放棄地が増えていき、どうしようもないと思っている。特に傾斜地では無理である。

(委員)

平地のやりやすいところでないといけない。桃山の桃は、若い子が 3 人やりたいと従事している状況。

(委員)

「たま駅長」により多くの人が出てくるが、駅だけが有名になっている。まわりも併せて活性化できないかと考える。個人的に思っても何もできないので、地域の活性化や子育てのことなど、どうしていくかということをお話し合える会議の場などを設置するとよいのではないか。

(委員)

戦略の中で、商工会のこと、商業に関わることがひとつも書かれていない。商工会との連携との記述のみである。旅館、飲食など商業においても世代交代の時期を迎えている。跡継ぎがいなくてやめてしまい、商工会も会員が減っている状況である。農業のことばかり記述されているが、商業もやっていかなければいけないと考える。老舗などもあり、これまでやってきている方の世代交代の支援が必要ではないか。

→ (事務局)「起業・創業」(p 15)に現在記述を入れている。記述の追加を検討。

(委員)

商業の活性化に関して、商業集積を再構築することが重要と考えられ、これは“まちづくり”の観点と思われる。「計画的なまちづくり」(p 25)に掲げられている公共交通の充実、生活インフラの整備などとあわせて、住み良いまちをつくっていく上で検討する課題ではないか。

(委員)

高野山が世界遺産になっている。根来のほうから高野山へつながる古道があると聞くが、そういった資源をほりおこしてはどうか。歩いて行けるなどの観光ルートづくりにつながるのではないか。

(委員)

「大師の井戸」というものもある。きちんと調べるとよいのではないか。

(委員)

韓国の済州島では、歩いてみて回るコースの開発をして、飲食などのお金をおとす仕組みも取り入れた、世界的にも注目されている「オルレ」という取り組みがある。九州でもこの取り組みを取り入れ始められていると聞く。歴史的背景とあわせてルートづくりをして、この取組を取り入れれば、世界的にも発信されて良いのではないか。

→ (事務局) 紀の川市は済州島の都市と国際姉妹都市となっている。「交流プログラムの構築」(p 10)などへの追加を検討したい。

(委員)

知事は優良農地を守るために農地転用を厳しくする方向を出されているが、非常にいいことであると同時に、きつくしすぎると地域振興、人口増には相反するともいえる。和歌山における優良農地を守ることにどれだけの意味があるのか、視点を変えれば、どっちともいいようがある。方針を出していかなくては。

(委員)

“まちづくり”“ゾーニング”の観点での考え方である。和歌山では中心が空洞化して、周辺に住宅が建つという状況がある。住宅等が点在すれば、例えばインフラ整備・維持等にコストがかかる。中の空き家の問題もある。そういった都市計画の問題となってくる。紀の川市は旧町それぞれでつくりあげてきたものがあり、それぞれの拠点で活性化されたが、現在は点在する状況になっている。都市計画と農地転用を併せて考えていくということである。急撃すぎるなど、いろいろご意見はあるところとは思いますが。

(委員)

ゾーニングといっても、線引きができてるのは和歌山市のみ。今まで全然やってきてない。突然のかたちで方針が出された。それで守っていけるのか、他に勝てる農業ができるのか。ほ場整備したいところがあっても、土地改良事業をした場合、一切売れなくなるということであれば、やりたくてもできない状況になる。一緒にやっっていこうとはならないのではないか。

(委員)

安くてやりやすいところで開発するといった無秩序な状況にならないように、まちづくり、ゾーニングを各市町村で考えてほしいという思いである。

(会長)

まちづくりに向けてのゾーニングといったことも戦略の中で配慮していくということで検討してほしい。

(委員)

近畿大学が入っているのはいい。政策金融公庫も近大本校と連携を組んでいるので、紀の川市と近畿大学の包括協定が結ばれば、公庫も連携していろいろな取り組みを展開していける。

子育てにおいて切れ目ないということで行くと、見落としがちだが、高校から大学へというステージである。最もお金がかかるところで、自宅外通学であれば1,000万と言われている。奨学金や教育ローンなどへの支援など、近大があるということで大学生に着目した支援に取り組めるといいのではないか。

また、高校生の活用をもっと考えるとよいのではないか。高校と連携して何か取り組みができるとよいのではないか。高校生の時に地域の中でいい経験をすることで、一度出たとしても帰ってこれるといったことを考えられるといいのではないか。島根県の隠岐の例などのように、高校の魅力化、ここで学んでみませんかといったことで、移住定住を呼び込むという方法もあるのではないか。中高連携の取り組みなども検討してみてはどうか。

(会長)

具体的に明記してもらえるとよい。

(委員)

これらの取り組みで本当に人口が増えるのか。近大生が岩出に住むのはアルバイトがあるから、便利だからである。行政の様々な施策の効果によって歯止めをかけるのは現実的には難しいのではないか。新たな取り組みも初め話題になっても、医療においても、商業などにおいても、人がいなければ常時開業が難しいなど経済的な問題もある。とはいえ、あげといて、やっていくしかないと思うが。

(会長)

金太郎飴の中にも、一つぐらいは戎さんがあるというものをつくれればいい。

(委員)

近畿大学との連携とあるが、どう連携するのか。卒業生は紀の川市にとどまってくれているのか。近大の学生さん達が働ける企業にきてもらう努力も必要ではないか。

桃山まつりなどいろいろ、近大の学生さんたちが手伝ってくれて交流している。実行委員会にも入ってもらっている。残ってもらえるようになるとよい。

→(事務局) 近大の学生さんは県内出身者が2割、県外出身者が8割で、そのうち就職が約8割で、その約9割が県外での就職となっている。既存企業の活性化と併せて、学生さんが働ける場づくりを進めていきたい。

(委員)

県は特殊にうまくいっているところを派手に宣伝するという手法を使われるが、特殊解は一般解にはならない。推進している6次産業化についても、儲けているのは1割程度である。特殊は特殊であり、同じように成功するのは無理である。現状を認識して動いてほしい。

(委員)

同じ事をやりなさいという宣伝ではなく、こんなやり方もあるので、やる気があるならば支援をする施策や方法がありますというスタンスと考えてもらえたらと思う。

(委員)

企業誘致についても労働力確保の上では効果は大きくないのではと言われる。

(会長)

各論については、報告書完成後に放談会でもして語れたらと思う。

(委員)

京奈和関空連絡道路整備について、もう少し書き込めないだろうか。また、全体的にK P Iについて、数値はどの段階でいれていくのか。直近の取り組みと、中長期の取り組みとをどう分けて考えるのか。時代の流れとして急速に変わってきているのは、日本における観光客がここ数年飛躍的に増えているということで、関空の利用客も増えている。その中で、量とともに質が問題で、人数ではなく「いくらお金を落としてくれたか」ということが重要との考え方をお聞きした。

紀の川市の魂は何か、「京奈和関空連絡道路整備」だろうと考える。同時にK P Iにどのような数値をおとしこんでいくかということも非常に重要なことである。

→(事務局)京奈和関空連絡道路整備は大きな柱として位置づけている。本市の特徴となる資源としてフルーツを核として考え、全国発信していく上でキーワードと考える。K P Iについては、関係課と調整して11/28ごろのパブリックコメントまでに入れる予定

(委員)

「フルーツに特化」ではなく、「フルーツを核とした」と表現するほうが良いのではないか。(資料

③)

4. 閉会